

賛同メッセージ



法政大学名誉教授

田中 優子

沖縄は、明日の日本だ。

すでに南西諸島から九州、関東に至るまで自衛隊の再編成が進み、日本列島は着々と、アメリカを中国から守る砦かつ攻撃拠点になりつつある。明日はウクライと同様の戦地になるかも知れない。今こそ辺野古新基地の建設を断念させ、軍事大国への道を防がねばならない。辺野古新基地建設断念こそ、その突破口となる。今や辺野古問題は沖縄のみの問題ではなく、日本全体の問題である。沖縄から全国へ、運動の波を起さねばならない。



ルポライター

鎌田 慧

辺野古の海を殺して、戦争の基地をつくる。

米軍と日本政府が一体化した野蛮な建設工事は、沖縄と本土の人たちを分断させています。本土に住む人間は加害者の一人にさせられています。その罪を感じたら、せめて出来ることを何かしたい、と思うのです。日本政府は辺野古に基地をつくるばかりか、宮古島、石垣島、与那国島にまでミサイルを配備して、戦争の準備をしています。

沖縄を戦争の犠牲地にすることに無関心であることは、本土に住むわたしたちが加害者になることです。



ジャーナリスト

金平 茂紀

建白書を引き継ぐことが真っ当な道

2022年をスタート地点として、新たな「戦前」が始まろうとしています。「琉球処分」以来の、この国で長年続いている構造的差別、つまり、沖縄を、本土の捨て石と位置付けること、沖縄を国内植民地のように扱い続けていること。こんなことを、もうそろそろやめようではありませんか。建白書はそれを高らかに宣言した訴えでした。それを引き継ぐことが真っ当な道だと考えます。仲間割れをしている暇はもうありません。少数派であることは決して恥ずかしいことではありません。声をあげ続けましょう。今現在と未来のために。



哲学者
東京外国語大学名誉教授

西谷 修

日本は再び破綻しない戦争の坂を転げ落ちることになる

オリンピックは無観客で行われたが、辺野古の新基地も使えないのが明らかなのに建設だけは強行されている。住民を無視した権力のアリバイ作りとしか考えられない。そのアリバイが今は「台湾有事」というフェイクで塗り固められ、再び沖縄や南西諸島を戦争の矢面に立たせようとしている。この日本政府の動きに、早くから太い楔を打ち込んできたのが新基地を作らせないと地元の運動だ。この運動を支えなければ、日本は再び破綻しない戦争の坂を転げ落ちることになるだろう。



ピース・フィロソフィー・センター代表

乗松 聡子

日本人の対米従属の犠牲は日本人自身が担うべきであって沖縄人ではありません。

アジア太平洋戦争で、米国は大日本帝国を倒すだけでは取らず80年近く経った今も日本と朝鮮半島の南側を軍事占領したままです。今、日本による沖縄の植民地支配を利用して、中国と朝鮮に対する敵視政策を強化し、東アジアを再び戦禍に陥れようとしています。その戦略の中核にある琉球弧全体の基地化を許すことはできません。日本人の愚かな対米従属の犠牲は日本人自身が担うべきであって沖縄人ではありません。辺野古基地反対。



「辺野古」県民投票の会
元代表/大学院生

元山 仁士郎

沖縄県民が示した民意に、日本政府・日本に住む人々は答えきれているのでしょうか。

辺野古新基地建設に7割もの人々が反対した「辺野古」県民投票から4年が経ちます。沖縄県民が示した民意に、日本政府・日本に住む人々は答えきれているのでしょうか。

あなたができることの一つとして、この国会請願があります。国会請願は、国会・委員会で諮られるなど、一定の影響を持ちます。辺野古新基地建設をはじめとする沖縄の基地問題を国会、そして全国でより活発に議論するためにも、この取り組みにご協力ください。



作家

落合 恵子

今止めないで、いつ止めるのか。
止めるのはわたしたちひとりひとりだ。

1972年、アナウンス室所属だったわたしは、ラジオ局のモニターで、初代知事・屋良朝苗さんの本土復帰の決意に耳を傾けていた。沖縄が、歴史上常に「手段として利用されてきたこと」を拒否する、というようなメッセージだったことを覚えている。しかし現実には……。

大田昌秀知事は何度も語られた。「沖縄は手段あるいは政治的質草（しちぐさ）にされ、利用され続けてきた」と。ここにも「手段」という無念きまわりない言葉と本土への問いかけ、そして「政治的質草」という、この上なく正当な憤りがあった。しかし、現実は何？
どこが変わったか。どこに風穴があいたのか。

辺野古の新基地もまた今後、「手段」として、そして「政治的質草」として米国に差し出され、「この国」に利用され続けていくのか。今止めないで、いつ止めるのか。止めるのはわたしたちひとりひとりだ。

沖縄のおばあは、海を見て呟いた。きれいな海がある限り、わたしたちは暮らしていける。

畑を見て、おばあはさらに言った。土があれば、タネは育つことができる、と。どの国の、どの社会であっても、それは命あるものの基本であること、平和のものであることを、わたしたちは心に刻もう。わたしたちこそ、「当事者」であるのだ。